

茶道から見た国際化、国際化から見た茶道

田中 仙堂

はじめに

「喫茶を道に高めたのは、世界でも日本人だけでしょう」という、やや誇らしげな反応を、茶道の歴史を説明した時に、日本人から受けることが多い。この方達は、「アメリカ茶道」が模索されていることを知ったらどのような反応を示すのであろうか。それが、「アメリカ茶道」の記事に接した時の私の第一印象であった。⁽¹⁾

柔道、相撲を例にとれば、お家芸とか、国技という言葉が、どこか空しく響くように、茶道にも「伝統文化」という言葉が空しく響く日が来るかもしれない。国際社会の文化変容の圧力に「伝統文化」も曝されるのは、自明の理ではあるが、実感として茶道の変容が意識されたのは最近のことである。どうやら、われわれは変化の時代を生きているらしい。現在進行形の変化を探るには、ささやかな自身の経験を手がかりにすることにも意味があろう。世相の変化と照らし合わせ、また、国際化の先駆者が残してくれた茶書を紐解くことで考えなおしてみたい。

1、世界の変化と一茶人の国際化体験

「日本で飛行機が落ちたことを知っているか」とサマースクールの学友達に聞かれたのは、留学先のカナダであった。現在から見れば、27歳ではじめて海外旅行をするのは、遅い部類にはいるだろう。しかし、1977年に大学に入学した当時は、卒業までに海外旅行をという風潮が漸く始まりだしていたころかという印象をもっている。母校暁星学園の後輩達は私が卒業して10年たらずで、高校1年生でフランスにホームステイするようになる。1993年生まれの息子は、友達に誘われて小学校2年で海外旅行を経験した。小学校二年時の私は、海外旅行に初めて行く父と母のために送別会をしたり、担任の先生に、両親が20日程度、外国に行くことをわざわざ断っていた。僅かな間で、われわれと海外との関わりはずいぶん気楽なものになったものである。これも日本社会の「国際化」の一面なのであろう。

1985年8月の飛行機の墜落事故に関して印象的な質問は、二人の坂本が存在であった。サマースクールのフランス語会話の先生は、御巣鷹山に墜落した日航ジャンボに載っていた日本人歌手「サカモト」を、「坂本龍一」と思って、授業に新聞を持ってきて質問した。「坂本九」で「龍一」とは別人であることを説明した時に喜んだ表情は今でも忘れない。小さい頃とはいえ、坂本九の活躍を知る世代としては、死者に対して失礼ではないかと不快さを覚えつつも、YMOが海外にも受け入れられているという報道が間違いないのだということを目前のファンを目にして実感した瞬間であった。

夏の語学研修を終え、大学院の新学期が始まった9月、G5の蔵相会議でドル高相場に協調介入することが決定する。いわゆるプラザ合意である。円高は、カナダドル建てで奨学金をもらっていた私には、円換算した時の目減りとして記憶されている。しかし、日本では、ドル換算した時の国内資産が大きくふくれあがる。円は海外で使う方が使い手があるとの実感がその後の海外旅行ブームを後押しすることになる。

もちろん、当時から海外に多くの留学生が出ていたし、日本人学生だけが集まっていた語学研修が意味がないという批判もすでにあった。私も、ケベックに留学するに際して、回りにほとんど日本人学生がいないのは良いことだと考えていた。

1979年に出版されたエズラ・ボーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』に象徴されるように、80年代は、欧米も学ぶべき対象として、日本を意識し始めたころである。⁽²⁾ そもそも、ラバル大学と東大との間で交換留学生を制度化したいという意図が、東大で社会科学を専攻する院生を最初に送り出してくれないかという形で私の留学と関わっている。サン・シモンで修士論文を書いた私は、フランス語というつながりだけで、フランス語圏のケベック州

に縁ができたことになる。

ラバル大学での指導教官は、ケベック・ナショナリズム研究の大家であった。私は、サン・シモンの産業主義思想とのつながりを考えつつ、ケベックの60年代の産業化とナショナリズムの関係を研究テーマとした。留学の目的に、サン・シモンとか、産業主義といってもピンとこない人には、「国際化の時代を迎えて、アメリカと国境を接して独自性を模索するカナダの経験は、これからの日本にも参考になる」という説明をしていた。当時は相手にうなずいてもらうための半ば苦し紛れの言い訳だったが、今となれば、もっとその視点を掘り下げて考えておくべきであったと反省させられる。

海外で日本文化を紹介するために、お茶を点てられるように練習するという人があるが、ホームステイ先の一家に、まず一服点てて見せたことを覚えている。しかし、寮での留学生活では、茶はもっぱら一人で点てて一人で飲んだ。

私にとっては、一服のお茶は日本との繋がりを確認するものだったように思う。日本から送ってもらっていた雑誌に『アクロス』というトレンド雑誌があった。渋谷・新宿といった繁華街の流行の定点観測を目玉にした雑誌である。社会学といっても現実への関心よりも、理論にあこがれる私は、日本にいたらこんなに熱心には読まないのに不思議だと思いつつ、到着を楽しみにしていた。1985年は、教育現場の「いじめ」問題が大きく取り上げられ、テレビ番組から「金妻」が流行語になり、「ファミコン」が爆発的に売れた年と記録される、世相面でも曲がり角の日本の姿に取り残されるような気分をいだいたのであろうか。抹茶を喫する量と日本の世相情報を読む量は、いずれもこれまで日本にいた時よりも多くなったような気がしている。

一方、茶道の紹介といっても、留学生の身ではお茶を点てて干菓子とともに振る舞うという程度で、相手も日本の珍しい飲食物を喫したという程度の印象であろう。茶道紹介を目的として、海を渡ったのは、流派の副会長に就任してからであった。

副会長に就任して最初の行事として社中の助けを得て、ベオグラードでの日本文化祭に参加した。その1988年を振り返れば、5月に、オレンジと牛肉の自由化が決定したことで、国際化の帰結としての貿易の自由化が見えはじめた時であった。しかし、それは後知恵で、当時の感覚としては、とにかく国際交流は必要で良いことであった。海外での茶会も珍しくはなくなっていたが、副会長就任と合わせて、共産圏のユーゴスラビアでの茶会ということで読売新聞が取り上げてくれたことを覚えている。東京圏の平均マンション価格が前年に比べ3割上昇し、「狂乱地価」が叫ばれた年であったが、国内の景気の良さは、われわれを海外へと押し出す形での国際化を歓迎していた。

ベオグラードの茶会に話を戻すと、実質は点前を見せての呈茶とならざるをえないが、茶道の紹介ということで、パネルやパンフレットを用意してできるだけ背景を補ってもらおうと考えた。しかし、スラブ系の言語だと翻訳された言葉を見ても聞いてもさっぱり分からないので、参加者の反応や効果は良くつかめなかった。パリのホテルでベオグラードに戒厳令が発令されたことを知ってベオグラード入りし、無事紹介を勤めたあとでも、ベオグラード空港の封鎖の合間に出国したことなど、英仏語で耳に残るのは、事故がなくて良かったという想いだけである。それから1年後、ベルリンの壁は崩壊した。

翌年の海外の茶会は、モントリオール市美術館で徳川美術館の海外展にあわせて行った。徳川美術館へモントリオール市での海外展の打診があったのは、私がケベックに留学していた時で、視察に訪れた徳川館長のカナダ滞在時の秘書役を、娘の婚約者という立場で務めたものであった。その時から数えると足かけ五年目の企画実現ということになる。二度目ということもあり、この時はわれわれとカナダ側の茶をめぐる認識のギャップが見えるようになってきた。

発端は、費用の問題であった。こちらが相手に要求した費用は、道具の輸送費保険代、設営費、通訳への支払いといった全くの実費であった。それを茶会からの収入で調達しようと相手の財務担当者は考え、一人10ドルという茶会のチケット代を付けた。これは、二つの点で私には受け入れられがたかった。まず、社中の一行30名は、旅費を自弁する形で協力してくれている。お金をとったらその人たちがボランティアで来ているということが理解されないだろうと思った。当時、カナダで、10ドルあれば、そこそこのディナーが食べられる値段、寮生活をしていた時代には、一日分の食費は十分にまかなえた。その値段を払って、干菓子と、抹茶一服では、参加者からは、「それでおしまい？食事は出ないの？」ということにもなりかねない。そういう反応を同行した人たちに聞かせるわけにはいかない。

茶会の値段の入った予告のポスターが張られたのを知ったのは6月初めであったろうか、8月末に渡航する前に、そんなことをするのならわれわれは行かない、茶会は中止するというファックスを送った。思えば、展覧会の会期の後半に茶会が設定されて徳川美術館のスタッフも常駐して現地の様子を知らせてくれた点、展覧会の通訳として雇われていた知人の日本人留学生が、高い語学力で私の長大なファックスを次々に正確に翻訳してモントリオール側に渡してくれた点などの幸運に恵まれて、一行は渡航することができた。

茶会は好評であったが、予約制とはいえ、ただでお茶とお菓子をもらって文句をいう人はいない。オペラの引越越し公演なら、裏方も含めた一行の渡航費とギャラをまかなうチケット代をとることと比較すると、茶会は、「ビジネス」ではなく、「文化交流」であった。外国に文化を輸出して、そこから利益を得ようという考えはアニメが海外進出するまで、日本には、成り立たなかったのではないか。当時は、ソニー、松下がそろってアメリカの映画産業を買収する時代であり、文化ソフトは買うものだったのだ。

8月の茶会では、なぜお茶を奉仕する人は全員女性なのかという質問があった。日本のビジネスマンは仕事に忙しくてツアーに参加する時間はないのだと誤魔化した。茶会を行った1989年の5月に、アメリカは日本を「不公正貿易国」に特定した。スーパー301条の発動である。7月のアルシェサミットでは、宇野首相とブッシュ（父）大統領との間で、「日米構造協議」を開始することの合意がなされ、9月に第一回会合がもたれようとしている時であった。日本は、貿易制限を設けて一方的に黒字をため込んでいる国と見られていた。日本人ビジネスマンは、黒字をもとに、アメリカ本土を買い取らばかりの勢いであった。

「ティーセレモニーは何の役に立つのか？」という率直な質問を何度も受けた。いかに解説を添えたとしても、当日の茶会参加者の目に見えるものとしては茶を点てる場面だけのデモンストレーションでは、予備知識のない人々にとって、はじめての茶会はなにやら訳の分からない「儀式」にしか見えないのが、正直な感想ではなかったか、と反省させられた。

同時に、「ティーセレモニーは何の役に立つのか？」という質問に、日本文化の中での茶道の位置づけを知りたいという欲求の現れを感じることもあった。日本の伝統文化も、日本の経済力に支えられる形で、単なるエキゾティズムを離れて、興味を持たれ始めたような感覚を持っている。茶の「儀式」と、経済的繁栄を誇る現代日本とがどう結びつくのか、国際化の時代は、茶道文化に対して本質的な問いかけを頭わに始めている。

2、国際社会に向けられた『茶の本』

「ティーセレモニー」といってしまうと、茶道の持っている側面の一端しか伝えられないので、「チャノユ」とそのまま訳さずに伝えようという動きが自覚化されて、30年近くになる。⁽³⁾『日本事物誌』の著者チェンバレンに代表される「長ったらしく無意味で単調な儀式」としてのティーセレモニー理解への反発の歴史は長い。

岡倉天心は、『茶の本』の中で、「ティーイズム」という言葉を、提示している。『茶の本』がニューヨークで出版されのは、1906年、日露講和の翌年である。講和を仲介したアメリカは、すでに日本を脅威と認識し始めていた。日本脅威の認識は、翌1907年、日本人労働者のアメリカ入国禁止措置に具体化される。太平洋戦争において日本を決定的にたたきのめした後、アメリカは、日本をアジアの共産主義化を防ぐ「同盟国」として扱う。冷戦状況を利用して、日本が経済成長を遂げたことは、ここで述べるまでもない。

カナダで茶会を行った1989年は、ジェームス・ファローズの「日本封じ込め」がセンセーションを起こした年である。アメリカはソ連の次の脅威として、大きくなりすぎた日本を見るようになっていた。

天心は、『茶の本』を書く時に、アメリカの対日観の変化も念頭においていたと思われる。異質で排除すべき脅威として見られはじめた時に、茶に代表させて日本の文化を欧米に理解させるという試みとして『茶の本』を読み返すことは、カナダで茶会を行った頃から必要であったのだ。遅ればせながら、未完の宿題に手を付けておきたい。

天心は、東洋および茶道がきちんと理解されていないことへの嘆きをもっていた。

みずからの中の偉大なものの小ささを感じることをできない者は、他人の中の小さいものの偉大さを見過ごしやすい。普通の西洋人は、なめらかな自己満足にひたって、ティーセレモニーに、東洋の珍奇と

稚氣を構成する風変わりなもののさらなる一例をみるにすぎないであろう。⁽⁴⁾

ティーセレモニーは、西洋人から風変わりなものとしか理解されていない。この無理解は文化を評価する論理の違いに由来すると認識していたことが、続く有名な箇所からは、明白である。

西洋人は、日本が平和のおだやかな技芸に耽っていたとき、野蛮国とみなしていたものである。だが、日本が満州の戦場で大殺戮を犯しはじめて以来、文明国と呼んでいる。近ごろ、「サムライの掟」——わが兵士が勇躍して身命を捨てる「死の術」についての多くの評論を聞くけれども、ティーイズムについてはほとんど意が惹かれていない。ティーイズムにこそ、わが「生の術」を大いに表している。もしもわが国が文明国となるために、身の毛のよだつ戦争の光栄に抛らなければならないとしたら、われわれは喜んで野蛮人でいよう。われわれの技芸と理想にふさわしい尊敬がはられる時まで喜んで待とう。

天心は、産業化された兵器で近代戦を遂行する国を「文明国」と呼び、「文明国」にならないと、その国の持っている文化の価値が正統に理解されない当時の国際社会の構造を指摘している。戦後、日本文化を理解しようという傾向が強まるのは、経済成長という国際社会の物差しでめざましい成果があればのことであった。経済大国としての日本が出現してから、日本の食文化や絵画・工芸に影響を受けたことを認めるのが、恥ずかしいことではなくなり、日本食ブーム、ジャポニズムを評価する見方等が広がったという傾向を指摘することは可能であろう。

経済大国を自覚した平成日本は、今日の「文明国」たるべく、「メセナ」、「フィランソロピー」といったコンセプトを導入した。いわば、文化を評価する物差しを輸入したわけである。それらが十年以上経っても日本に完全に定着したともいえない原因は、景気低迷に加えて、借り物の物差しという点もあるのではないか。

一方、天心は、日本には自前の文化評価の物差しがあるのだ、と主張している。日本の文化評価の物差しは、生活を根底で規定する規範で、天心は、「ティーイズム」と名付けることで、珍奇な儀式ではなく、主義・主張なのだとのメッセージを発信している。

日本が他の「文明国」とは違った文化体系を発展させてきた理由は、江戸時代の国際環境に求められる。

日本が長いあいだ世界から孤立していたことは、内省に資するところ大きく、ティーイズムの発展にきわめて好都合であった。われわれの住居と習慣、着物と料理、陶磁器、漆器、絵画——文学ですら——あらゆるものがティーイズムの影響を蒙ってきた。日本文化の研究者ならその影響の存在を無視することは不可能であろう。ティーイズムは貴婦人の居間に進入したし、身分いやしい者の栖にも入った。われわれの田夫は花を生けることを知り、野人も山水をたつとぶことを知ることになった。

天心は、ティーイズムを研究することが日本文化研究に不可欠であるという位置づけと、ティーイズムそれ自体が生活文化であることを主張している。前者の主張は、海外からの日本文化への関心を、茶道に向けさせる作用をもっていた。後者の生活文化に関しては、「生の術」という言葉を天心自身は使っているが、茶道が、生活全体をシステムとして統御する原理として機能しているという点を強調する。利休が自らの命までを茶道のために捧げたというエピソードが『茶の本』全体の結びにおかれることになる。

西洋から押しつけられる東洋認識（ティーセレモニー）に対して、別の認識（ティーイズム）を提示するのが天心の戦略であった。その意味で天心は、西洋からのオリエンタリズムと戦った存在ということが出来るであろう。一方、西洋対東洋という対立軸は、そのまま再生産されたことでむしろ強化されたという言い方も出来る。また、自国の文化でなく、他国の文化を語る時に、認識を支配する形式としてのオリエンタリズムという問題が天心にとっても発生する。

そもそも茶を飲用する習慣は、広く東西に存在する。天心は、飲用の仕方に基づいて、①固形茶を粉末にして煎ずる茶、②茶の粉末に湯を注いで点ずる茶、③葉茶に湯を注いで淹す茶、と正確に区分する。その飲用法は、①唐、②

宋、③明、のそれぞれの時代に歴史的起源が求められるもので、さらに、①古典的、②ロマン主義的、③自然主義的、と享受形態が特色付けられている。茶文化の全体的な配置の中で、日本の茶道に特権的な地位を与える天心は次のような説明を行う。

日本のティーセレモニーにわれわれは茶の理想の頂点をみる。1281年の蒙古襲来を首尾よく撃退したために、わが国は、中国がこの遊牧民族の侵入のために断たれてしまった宋の文化運動を継続することができたのである。茶はわれわれにとっては飲む形式の理想以上のものとなった。それは生の術の宗教である。

この図式は、アジア地域の文化遺産が日本でのみ今日研究できる、と規定した天心の東洋文明の博物館としての日本論の延長線上にある。ティーイズムは、当時、日本にのみ存在するオリジナリティであった。中国の茶が、発展の契機を奪われたものとして表象されていることに注目するならば、「日本は「東洋の専制」「東洋の停滞」の名をもっぱら中国に着せながら、中国を東アジアにおける文明的中心の位置から引き降ろす」⁽⁵⁾と指摘される近代日本のアジア認識の特徴を共有している。

東洋と西洋という範疇で論ずる場合、代表制の問題が不可避免的に存在する。西洋に関しては、海軍はイギリス、陸軍はドイツといった具合に、分野ごとそれぞれに一番学ぶべきと考えた国がモデルとなった。その意味での「西洋」は、世界史の時空の何処にも存在しない観念的な複合物であったことは天心もよく承知していた。

「東洋」の場合は、日本が中国に変わって東洋の中心であることを主張したのが日本の近代史であると考えてもよい。大乘仏教は、インド、中国で滅び日本で最高段階に達したという言説と、抹茶の飲用による茶儀式は、日本で理想の段階に達したという言説には、明朝の滅亡を見て、中華文明の継承者は日本であると考えた江戸初期以来の小中華意識と通ずるものがある。近代日本は、戦争を通じて、アジアで唯一の独立国から、文明国、そしてアジアの盟主であるという具合に自己認識を肥大させつづけてきた。

天心の「アジアは一つ」を大東亜共栄圏のイデオロギーと見ることは、政治的な覇権をアジアにおいて確立することを目指さなかった天心への誤解以外の何者でもない。しかし、文化的な代表権をアジアで日本に与えるという点では、「日の出る国」と自己規定した古代以来の系譜に連なっているといつて良からう。

大陸からは「東夷」と位置づけられる日本が、侮られまいとして自己規定を行う時に、大陸の中華思想への対抗上、過剰に思想的な装置を必要としてきたのは、「神州」に限らない。元朝になって宋代の理想が断絶されたというレトリックは、天心にとって女真族の清朝を意識したものであったのだろう。一方、ギリシャ・ローマ文明との連続性を、アルプス山脈はおろか、ドーバー海峡、ひいては大西洋を越えてまでも主張する西洋の側が、宋代の失われた理想が日本へ継承されたというレトリックを否定することは、天につばするようなものであることを天心は確信してきたように思われる。さらに、西洋に対して、唐・宋・明の時代に対応する茶の三段階の発展図式を提示することは、彼らの喫茶文化が、明代以降の淹茶文化から派生したものにすぎない点を、いやでも意識させるものであった。

『茶の本』で利休をティーイズムの殉教者⁽⁶⁾として描く天心にとっては、文化活動の価値は、ひとりひとりにとってどう大切に扱われるかにつきるのであって、文明化の度合い等によって序列付けられるようなものではなかった。

まことに不思議なことに、かくも相隔たった東西の人間性は茶碗の中で出会っている。東西を問わず重んぜられているのは (Tea Cult) というアジアの儀式だけなのである。白人はわれわれの宗教と道徳を嘲笑してきたが、この褐色の飲料はためらいなく受け入れたのである。午後のお茶は今日、西洋社会で重要な役割を帯びている。

天心が、『東洋の理想』で日本美術史を、『日本の覚醒』で日本の国民意識の形成を描いた後で、茶に焦点を絞った『茶の本』をなぜ書いたかへのヒントを、この一文は与えてくれる。茶への愛好は、洋の東西を問わない。アジアの儀式の中で、茶を飲む儀式だけが、西洋にも取り入れられていることから、茶の飲用を取り上げることは、人類にと

って普遍性を持った問題を扱っていることになる。おなじ茶を飲むといっても、そこに込められている意味の違いを比較することで、相互の価値観の違いを明白にさせることができる。

天心は、また、洋の東西を問わず、茶を愛好する文人に対して、ティーイスト (Teaist) との称号を与えている。今日の私たちは、天心が非白人を含めて人間性という言葉を使うことに何の違和感も感じない。しかし、10年後の第一次世界大戦のパリ講和会議でも、日本の人種平等の提案が退けられた時代である。白人種と有色人種は、融合することはできないし、融合することもないだろうというのが、イギリス外務省の見解であった。⁽⁷⁾

民族的な偏見は、古代以来存在するが、20世紀初頭の人種的な偏見は、科学的な装いをまとった優生学によって強化されてきていた。アメリカでは、天心が『茶の本』執筆していた1905年までに、黒人を人類と見なさなかったり、優等人種との競争で真っ先に姿を消すだろうという偏見を書いた書物が、出版されている。『日本の覚醒』に続いて『茶の本』でも黄禍論をもじって「白禍」と皮肉った天心にとっては、「人類」といっても、「白人」のみが意味されている状況はよくわかっていただろう。

第一章の「the cup of humanity」という命名は、かなり思い切った題のつけ方だったようである。アジア人を「人間」と認めないのに、なぜ彼らの好んだ飲料を好んでいるのか、という天心の反問が潜んでいたのではないだろうか。

3、国際化とグローバリゼーション

過去の偏見にこだわっていても、生産的ではない。われわれにとって重要なことは、これからのことであった。海外に出てからの体験を振り返ってみると、「国際化」から「グローバリゼーション」ないし「グローバル化」へと、世界との結びつきを語る言葉が変化していることが気になった。バブル期の国家政策としての「国際化」は、「世界を日本のイメージで描き換える試み」だったとの指摘がある⁽⁸⁾。回顧しつつ、その指摘には実感として頷けた。「グローバリゼーション」のイメージは、「グローバル・スタンダード」に代表されるように、「日本が世界の基準で作りかえられる痛み」としてイメージされているように思う。

日本が世界の基準で作りかえられる痛みのイメージの始まりは、1991年の湾岸戦争への日本の多大な金銭的な負担が、世界への貢献として評価されないというショックに端を発しているように思う。1996年に金融システム改革が指示され、日本版ビックバンが喧伝されて以降は、日本の金融機関が外資に買いたたかれる報道に、これが構造改革・グローバリゼーションかと思われ続けてきたのが日本のビジネスマンともいえるだろう。

グローバリゼーションの領域は経済に限らない。政治的には、アメリカの一極支配が指摘されているし、文化的な領域でも、アメリカ文化で世界が画一的に塗り替えられることへの抵抗は、ヨーロッパを中心にして強い。しかし、戦後日本の復興自体が、進駐軍やテレビドラマからアメリカ的な生活にあこがれて、それを実現していった過程でもあるので、近年になってアメリカナイゼーションを問題にしても、すでにそれがわれわれの生活の一部になってしまっているところも多いだろう。

むしろ、戦後、生活が洋風化する中で、希少になっていく「和風」を味わえるものとして茶道には支持が与えられてきたという側面も直視していかなければならない。希少な「和風」としての茶道が、海外に日本文化を紹介する際に不可欠に感じられるのは、当然のことであった。しかし、茶・花・歌舞伎といった定番の日本文化紹介に海外からの人々が飽きたらなくなっているのも事実である。

日本版のビックバン元年の1996年7月、日米財界人会議で来日した夫人達に茶道を紹介する機会があった。限られた時間を有効に使うために、草月会館へ出向いて花と茶を半日で紹介するプログラムに調整した。男性が工場見学をしている間に、女性はお茶とお花の日本文化という分け方を聞いて、参加者もあまりおもしろく思っていないのではないかと予想された。事実、茶室の前に集合した人の中には、お茶はもう何度も見ているという雰囲気をつたよわせ腰掛けている人もいた。

茶の葉が、紅茶とおなじ種類の木からとれる植物であることから始まって説明を続けたが、アメリカ独立戦争との関わりを語りだした時に、姿勢が変わりこちらへしっかり関心に向け直してくれたことが印象的であった。別の機会であるが、キューバからの研修生には、砂糖を抹茶に入れないことから説明をしたこともある。茶はアジアを中心に古い愛好の歴史を持っている。アジアの外へは、17世紀からはじまって、コーヒー・ココア・砂糖といった嗜好品

の普及と重なる歴史がある。歴史を通じて、世界各国の人となんらかの接点を持つことができる媒体が茶である。

これが日本の茶道ですと一方的に押しつけるのではなく、あなた方の茶との関わりは、どうですか、私たちの茶との関わりはこういう形ですと対話することが、一碗を前にしての交流ということであろう。

「グローバリゼーションの概念は、世界の縮小と、一つの全体としての世界という意識の増大の双方に言及することが指摘されている⁽⁹⁾。大航海時代に、茶が広がった歴史は、世界が一つの統一体になっていった歴史の一部を構成している。グローバリゼーションというメルクマールは、単に、商品が世界に流通したという段階から、メディアやインターネットのネットワークを通じて、遠く離れている人が考えていることも容易に知りうるようになった段階への移行とともに盛んに用いられるようになってきた。物だけでなく、物に込められた意味までが流通するのがグローバリゼーションの時代といえないであろうか。われわれに求められることは、喫茶愛好の文化は地球規模で存在しているという目から、自分たちの茶への愛好を見直すことであろう。

それは、「世界を日本のイメージで描き換える」（外国人の茶道人口を増やす）ことでもないし、「日本が世界の基準で作りかえられる」（茶道の方式を外国人向けに変える）ことでもない。茶との関わりを道に高められるのは日本人だけだという思いこみを捨てて、それぞれが、一人の人間として私は茶との関係をどのように作っていくことを好ましく思っているのかと問いかけることがスタートになる。そのようにして作られた関係は、その人とは切り離せないものとなり、いわゆるアイデンティティとして機能するであろう。

国民国家の枠がゆらいでいる今日、「日本人だから」といういい方で特定の文化活動に人を結びつけることは出来ない。したがって、国際化時代に、「日本人だからお茶ぐらいは知らないといけない」という形で茶道学習に吹いた追い風は今後は期待できないかもしれない。各人にとって、大切なのは、自分自身がどれくらいつきあっていけるかという点だからだ。

まとめ

日本の経済成長から、日本文化全体への真摯な関心が高まる中で、茶道が国際的に紹介されることは、単なる物珍しい儀式という扱いを越えて、現代日本人にとっての茶道の位置づけが問われることであった。その過程で、外国人に紹介するための輸出向けの「伝統文化」では飽きたらなく思われて久しい。

大航海時代からの世界交易の結果が、喫茶の世界的な広がりには反映されている。物は地球規模に流通していたが、近年の変化が、グローバリゼーションと名付けられて過去の趨勢と区分されるのは、物に込められた意味もが地球規模に流通する時代の到来を強調するためだと思われる。

海外で茶道に与えられた意味を知ることの出来た天心は、日本人が与えた意味との違いを『茶の本』でティーイズムとして主張した。天心は、茶道が日本人が長い時間をかけて作り出した物差しであることを主張し、その基準が何なのかを明確にしようと務めたのであった。今日でも、日本の物差しがあることをはっきり示し、ここでは自前の物差しをルールとすることを宣言することは、茶道に限らず不可欠なこととなっているのではあるまいか。

註

- (1) 真理子・ラフール「第一回アメリカ茶の湯会議報告」『茶の湯文化学会学報』No37、2003年5月。
- (2) 日本論の論調のより詳しい変化に関しては、奥井智之『日本問題―「奇跡」から「脅威」へ―』（中央公論社、1994年）を参照せられたい。
- (3) 裏千家の英文の茶道機関誌“CHANOYU Quarterly”が1975年に刊行されたことを目安とした。
- (4) 茶の本の翻訳は、桶谷秀夫訳（講談社学術文庫版）を基準として適宜修正を加えてある。
- (5) 子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか―近代日本のオリエンタリズム―』藤原書店、2003年、160頁。
- (6) クリストファー・ベンフェイは、天心の利休の死の描き方が、ソクラテスやキリストの殉教のみならず、リンカーンの死をも思い起こさせるものだと書いている（Christopher Benfey “The Great Wave” Random House, New York, 2003, p.104）

- (7) 人種偏見に関しては、次の段落の記述を含めてポール・ゴードン・ローレン『国家と人種偏見』（大蔵雄之助訳、TBSブリタニカ、1995年）に依拠している。
 - (8) テッサ・モーリス＝スズキ『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本ー』平凡社、2002年、21頁。
 - (9) ローランド・ロバートソン 阿部美哉訳『グローバリゼーションー地球文化の社会理論ー』東京大学出版会、1997年、19頁。
-